# 縄文・弥生文化の解明につながる三つの遺跡
# 考古学上の大発見～東名・菜畑・吉野ヶ里～

**大昔、私たちの祖先がどのような生活をしていたのか･･･。佐賀県にある遺跡から、祖先の暮らしぶりを学ぶことができます。**

(佐賀県文化財課提供)

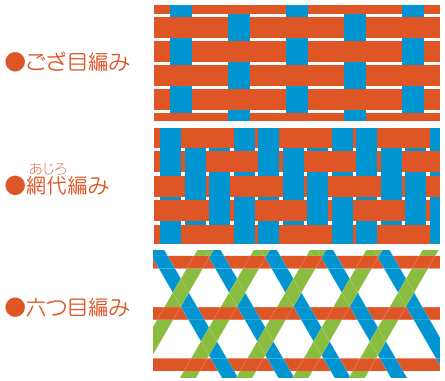
**吉野ヶ里歴史公園** 弥生時代の遺跡を発掘成果などをもとに復元しており、当時の生活の様子がわかります。

(佐賀市教育委員会文化振興課提供)

**東名遺跡から出土した大型編みかご**(高さ88cm)

口の部分がすぼまり底の部分がふくらむような形をしており、運搬や貯蔵用に使用されたと考えられています。東名遺跡からは大小さまざまな編みかごが出土しています。その編み方も多様で、現在も使われている編み方が既にこの時代からありました。(写真は復元した編みかご)

**東名遺跡から出土した編みかごの編み方の例**




## 約8000年の眠りから覚め 縄文の暮らしを教えてくれる東名遺跡

佐賀県で発見された日本最古の**湿地性貝塚**(しっちせいかいづか)が、**国史跡**の**東名遺跡**(ひがしみょういせき)(佐賀市金立町)です。**縄文時代**早期、今からおよそ8000年～7400年以前の遺跡と言われます。エジプトの古代文明の起こりがおよそ5000年前ごろと言われているので、それよりも古い遺跡だということが分かります。そのころの佐賀平野は、氷河期が終わって温暖化が進んだため海水面が上昇する**「縄文海進」**(じょうもんかいしん)の時期にあたり、海岸線が山のすぐ近くまで迫っていました。東名遺跡は、現在の海岸線から10数kmも内陸にありますが、当時は海に面した河口にあったのです。

東名遺跡からは、貝殻、動物の骨、土器、石器、骨格製品、木編みのかご、木の実、木製品など、国内最大級となる700点以上の遺物が発見されています。遺物から、ここに住んでいた人々が、魚介類を採集し、シカやニホンカモシカなどの狩猟を行うとともに、冬に備えてドングリを貯蔵していたことが分かりました。また、貝のブレスレット（貝製腕輪）などの装飾品を身に付けていたことも分かっています。なお、貝のブレスレットは国の重要文化財に指定されています。

その後、海水面はさらに上昇し、人々は東名から別の場所に移住したと考えられます。残された生活の跡は、約8000年後の2003（平成15）年、工事中に地下5mのところから偶然発見されました。「縄文海進」が進んだ後も、水を通しにくい粘土層に覆われていたため、縄文時代の生活ぶりがそのまま残されていたのです。しかも、東名遺跡は湿地にあったため、植物質や木製品などが水につかっており、よい保存状態で残っていました。湿地性の貝塚という、日本では珍しい東名遺跡は、縄文時代の高い技術や文化を現代に鮮やかによみがえらせたのです。

（唐津市教育委員会提供）

**菜畑遺跡復元水田**
日本最古の水稲耕作遺跡です。

## 日本最古の水稲耕作遺跡 菜畑遺跡

1979（昭和54）年、唐津湾に面した丘陵地帯で道路工事中に発見された国史跡の**菜畑遺跡**（唐津市）は、海抜10m前後のゆるやかな斜面にあります。菜畑遺跡は、縄文時代後期を中心に、縄文時代前期から**弥生時代**中期までの多くの地層から成り立っています。

その中で注目されたのが、縄文時代晩期の地層から見つかった**水田遺構**です。水田遺構は、およそ3000年～2300年前のものとみられており、現時点では日本で最古のものです。菜畑遺跡の発見により、それまで考えられていたより早くから、稲作が始まっていたことが証明されました。遺跡からは、炭化米や木製・石製農具が発見されています。また、東名遺跡から発見されたような狩猟、採集といった縄文文化の跡も見られます。菜畑遺跡は、縄文から弥生へと時代が移り代わる時期の解明に、大きな手がかりを残しているのです。

**COLUMN**

### 邪馬台国のカギは吉野ヶ里？

3 世紀末に中国で書かれた歴史書『魏志倭人伝』には、日本列島に女王卑弥呼が治める邪馬台国があることが書かれています。しかし、所在地については、九州説、畿内説の両方があり、現在までも決着がついていません。

吉野ヶ里遺跡で発掘された遺構が『魏志倭人伝』に記載される施設の様子に類似していることから、吉野ヶ里遺跡は邪馬台国の謎を解くカギといわれます。

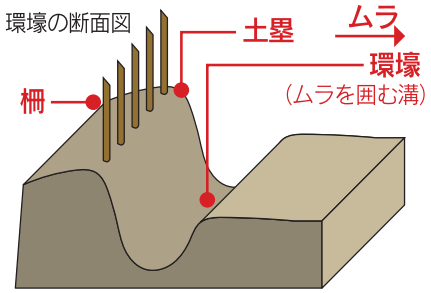
## 古代史の謎に迫る吉野ヶ里遺跡

**吉野ヶ里丘陵**（現在の神埼市・神埼郡吉野ヶ里町）では、昔から銅鏡やガラス製の玉などが出土していました。1970年代には、県内の文化財関係者たちの地道な調査によって、広い範囲から土器、石器、甕棺などが発掘されるようになりました。

1986（昭和61）年、当時、吉野ヶ里丘陵の南部に工場団地の計画がもち上がったため、文化財発掘の調査が実施され、吉野ヶ里丘陵一帯に広大な遺跡が眠っていることがわかりました。1989（平成元）年2月には、吉野ヶ里丘陵で大規模な**環壕集落**跡が発見されました。日本古代史の謎を解明するカギをにぎる**吉野ヶ里遺跡**が、私たちの前に姿を現したので

す。

吉野ヶ里遺跡は、およそ700年続いた弥生時代（紀元前4世紀～紀元3世紀ごろ）の生活の跡を残す国内最大規模の環壕集落跡であり、一つの農業集落が地域の中心的集落へと発展していく姿を残しています。




初めは小規模だった環壕集落は、弥生時代前期の後半（紀元前3～紀元前2世紀ごろ）には25000㎡程度になり、中期（紀元前2世紀～紀元1世紀ごろ）には20万㎡を越える規模になったと推定されています。中期の遺跡からは、歴代首長（指導者）を埋葬した巨大な墳丘墓が発見されました。埋葬者の身分の高さを示す銅剣やガラス管玉なども発掘されています。

弥生時代後期（紀元2～3世紀ごろ）になると、環壕集落は40万㎡（サッカーグラウンド56個分）の規模に発展したとみられます。環壕集落内部には、内濠や土塁、柵で囲まれ、物見櫓に守られている南北二つの内郭と呼ばれる空間があります。厳重に守られた北内郭は、祭殿と考えられる大型建物が存在することなどから、祭祀の場と考えられます。一方、南内郭は、竪穴住居跡や生活用具が多く出土したことから、首長たちの「居住区」であったと考えられます。また、物資を集積したと考えられる高床倉庫の跡も多く存在していました。当時は、青銅器、鉄器、木器、絹布、麻布などの手工業が営まれ、外部との交易も行われていました。吉野ヶ里遺跡は、ある一つの「クニ」の中心地＝「都」だったことをうかがわせます。また、吉野ヶ里遺跡には、同時代の中国の城郭の影響がうかがえます。

吉野ヶ里遺跡は、大陸文化とのつながり、日本の「クニ」の誕生過程、さらには、『魏志倭人伝』に登場する卑弥呼が治めていた倭の都があった邪馬台国の謎を解明するための重要な遺跡なのです。

佐賀県には、古代の人々の生活を知ることができる貴重な遺跡が残されているのです。

## 学校の取組

【イベントボランティア】

▌佐賀県立神埼清明高等学校

吉野ヶ里歴史公園内でのイベント運営に携わりながら、地元の魅力をたくさんの来場者にお伝えしています。

## 調べて書いてみよう！

みなさんの住んでいる地域にはどんな遺跡があるでしょうか。調べて書いてみましょう。

## 出かけてみよう！

**東名縄文館**（佐賀市金立町大字千布／巨勢川調整池内）

出土遺物やパネルの展示がされています。東名遺跡隣の巨勢川調整池佐賀導水管理棟にあります。

TEL 0952-98-2354／**休館日** 月曜日

**開館** 10:00～16:00（入館は15:45まで）

（佐賀市教育委員会文化振興課提供）

**末盧館**（唐津市菜畑3359-2）

菜畑遺跡から出土した貴重な資料が展示されています。

TEL 0955-73-3673／**休館日** 月曜日、年末年始／**開館** 9:00～17:00

（唐津市観光協会提供）

**吉野ヶ里歴史公園**（神埼郡吉野ヶ里町田手1869）

弥生時代の施設の復元や発掘物の展示がされていて、弥生時代を体感できます。

TEL 0952-55-9333／**休園日** 12月31日、1月の第3月曜日とその翌日／**開園** 9～5月 9:00～17:00、6～8月 9:00～18:00

（佐賀県文化財課提供）

## 検索してみよう！

佐賀県の文化財　佐賀県遺跡　佐賀県遺跡地図